令和６年３月 19 日

第３学期終業式式辞

皆さん、こんばんは。令和５年度も今日で終わりです。私にとっては、あっという間の１年でしたが、皆さんにとってはどうでしたか。松尾芭蕉は、『奥の細道』の中で「月日は百代（はくたい）の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり」と述べていますが、この年になるとそのことを実感します。

今年は、１月１日の能登半島地震や羽田空港での航空機衝突事故など、国内外に大きな衝撃を与える出来事から１年がスタートしました。それから３か月がたとうとしていますが、被災地では未だに多くの方が不自由な避難生活を余儀なくされています。

本校でも、被災地の方々に何かできないかと考え、定時制・全日制合同で募金活動を行いました。おかげさまで、生徒の皆さんや保護者等から多くの募金をしていただきました。本当に、ありがとうございました。集まった募金は、関係団体を通じて被災地の支援に役立ててもらっています。

日本では、これまでも阪神淡路大震災や東北大震災など大きな災害が発生しています。愛媛県でも、平成 30 年に豪雨災害が発生し、南予において大きな被害が出ました。

私が以前勤めていた吉田高校の近辺でも、大規模な土石流や地

すべり等が発生し、道路、農地、建物等が大きな被害を受けました。しばらくして、被災地復興ボランティアとして現地に赴くと、土砂が流入した家屋や瓦礫の山を目のあたりにし、呆然としたのを覚えています。

当時は、県内外から多くのボランティアが復興事業に参加されていました。その中には、高校生の姿も見受けられました。休憩時間に、ボランティアに参加した理由を彼らに尋ねると、「被災地のために何かしたいと思い、部活動の休みを利用して来ました」と答えてくれました。

また、四国をバイクでツーリング中に、豪雨災害のことを知り、急遽ボランティアに参加されたという北海道の親子もいました。そういった方々が、黙々と片付け作業に取り組まれる姿を見ていると、愛媛の人間として、心底ありがたいなと思いましたし、なんか胸が熱くなりました。

いまも被災した能登地方では、ボランティア活動に取り組む方がおられます。おそらく、その方々も「被災者のために何かしたい、被災地のために役立ちたい」という思いに駆られて現地に行かれたのでしょう。また、被災地に行けない人の中にも、募金や物資の送付等で支援している方々が大勢おられます。

仏教に、「自利利他」という教えがあります。意味は、「自分が幸せになると同時に、他人を幸せにする」です。こういった教え

は、キリスト教やイスラム教など他の宗教にもみられます。

人間誰しも、自分が一番かわいいものです。しかし、自分だけよければよいという考え方ではさびしすぎます。自分の幸せだけでなく、他者のため、社会のために尽くすという考え方も大切だと思います。先ほどの自利利他は、その精神を説いたものであり、時代や地域を超えて、私たちが受け継いでいくべき教えだと思います。

吉田でボランティア活動に参加しているとき、熊本から来られたという方々に会いました。その方々に話を聞くと、「平成 28 年に起こった熊本地震の際には、愛媛から多くのボランティアが駆けつけてくれました。今度は、私たちが恩返しをする番だと思い、やってきました」と言われました。それを聞いて、利他の精神がここにも生かされているなと思いました。

夕方、家の片付け作業を終えて帰るとき、その家の方から「今日は助かったわい、ありがとう」と感謝の言葉をかけられました。その言葉を聞くだけで、今日一日の苦労が報われた気がしましたし、自分がこの人たちのために役立っているという思いに満たされたりしました。

思いやりのある言葉や行動は、相手の心を動かしますし、自分が誰かのためになっているという自己有用感も高めます。また、先ほどの熊本の方々のように、助け合いの連鎖を生み出します。

人は、一人では生きていけません。様々な人々に支えられながら生活しています。また、人間だけでなく、動植物や自然環境など、この地球上にあるもの全てが、私たちの生活を支えてくれています。そういった意味では、私たちは生きているのではなく、生かされているといった方がよいのかもしれません。

いま世界を見渡してみると、地域間紛争や経済格差、環境問題、差別など様々な問題や課題が噴出しています。国内でも、世界に例を見ない少子高齢化が進行しており、どうしても将来に悲観的な見方をしてしまいがちです。

そのため、「どうせ、自分一人の力では社会は変わらないし、どうしようもない」とあきらめてしまう人がいます。しかし、果たしてそうでしょうか。何もしないうちから、簡単にあきらめてしまうのはいかがかと思います。先ほどのボランティア活動のように、思いが人を動かし、社会を動かすこともあります。

皆さんには、「どうせだめだろう」と簡単にあきらめるのではなく、「とりあえずやってみよう」と前向きに生きる人間になってほしいと思います。そういった人が増えていけば、必ず社会は変わります。

終わりに、皆さんが、自分の人生を自らの力で切り拓き、自分だけでなく、他者をも幸せにする生き方をすることを祈念し、式辞とします。